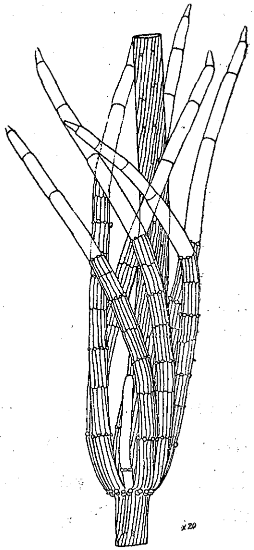
Chara globularis Thuil. f. **seminudifolia** Kasaki f. nov. (Fig.)

Segmenta ramulorum superiora semper 4–5 ecorticata.

Hab. Hondo : Pref. Ibaragi in lake Kasumigaura. (Leg. M. Sakamoto, Nov. 23, 1956, No. 3191—type in herb. Tokyo Metrop. Univ.

2. ホシツリモ *Nitellopsis* の新産地 On the second discovery of *Nitellopsis* in Japan.

筆者は昨年本誌上（31巻4号 p. 97～101）で，箱根芦の湖より得られたホシツリモ *Nitellopsis* を車軸藻類の日本新産属として紹介し，その後ひそかに第2産地を期待していたのであるが，意外に早くこの目的が達せられた。即ち昨年秋富士五湖地方に採集を行つた折，第2の発見地として河口湖を（31年10月9日），更に第3番目の産地として山中湖を（10月10日）記録し得ることとなつた。山中湖では稀にのみそれも sterile の個体を得たに過ぎないが，河口湖では極めて見事な群落が一小湾部内に発達し，且つ芦の湖では3年間遂に発見出来なかつた成熟卵器を発見し欣喜した次第である。（前報で述べた如くこの植物は stars による無性生殖が普通に行われるため有性生殖器官をつけることは本来極めて稀のようである）。尚雄器はこの際得られなかつたので10月27・28両日再び同地を訪れて調査したが，雄器は昨年は遂に未発見に終つた。慌しい日程であつたため湖沼条件の測定は充分行えなかつたが今迄報告された記録を斟酌すれば，両湖は芦の湖と極めて類似した型の湖であり，*Nitellopsis* の生育条件並びに分布の予想が一応窺える様に思われる。尚この調査に種々御便宜を賜つた藤伊魁氏に心から感謝申し上げる。（東京都立大学理学部生物学教室）



○中部山岳地帯のハイマツ着生蘚苔類群落（岩月善之助・服部新佐）Zennosuke IWATSUKI and Shinsuke HATTORI : Epiphytic bryophyte communities on *Pinus pumila*, an alpine shrubby pine, on Japanese Alps.

我々は 1955 年夏中部山岳地帯の着生蘚苔類の調査を行い既に研究の大半を終了したが，そのうちハイマツに関するデータを整理して報告する。

調査地点として長野県木曾駒ケ岳及び富山県立山の二山を選び，環境が厳しくハイマツの生育状態が貧弱な尾根附近，ハイマツが大形となり且つ各種の灌木が混るカール底及びその中間の斜面など三つの異つた環境を調査の対象とした。調査に当つては2×2mの方形枠57ケ（木曾駒ケ岳 35，立山 22）を上記三区域のハイマツ群落内に散布し，管

束植物，地上蘚苔類及び着生蘚苔類の各々について出現する種の被度を調査した。ハイマツ幹は地表面に接して高さ 5cm を越えぬ部分（基部），匍匐して高さ 10cm 以下の部分及び斜上幹の三部分に分けた（上部の幹や枝には着生蘚苔類は殆ど見られない）。

各調査地点に於ける優占種を簡単に紹介すると次の如くである。

1.　木曾駒ケ岳　a. **尾根**．伊那前岳・中岳間の尾根の南北両側及び極楽平（何れも海抜約 2,800m）西斜面ではハイマツは小形で約 30cm の樹高を示す。キバナシヤクナゲが随伴し，地衣類が地上に豊富である。地上蘚苔類群落では *Dicranum majus* が優占し，*Pleurozium schreberi*, *Drepanocladus uncinatus* forma *plumosus* も豊富である。着生蘚苔類は殆ど基部に限られ，*Ptilidium pulcherrimum* が優占する。幹上には *Habrodon piliferus* のみが認められる。

b. **斜面**．千畳敷カール及び極楽平西斜面（約 2,800m）でのハイマツの樹高は 40〜50cm，キバナシヤクナゲ，タカネナナカマドが随伴する。地上に地衣類は殆ど認められない。地上蘚苔類として *Pleurozium schreberi* 及び *Dicranum majus* が優占する。着生蘚苔類は種数・量共に尾根よりも多く，基部では *Hypnum plicatulum* が優占し，*Ptilidium pulcherrimum*, *Pt. californicum* も多い。匍匐幹には *Pt. californicum* 及び *Hypnum pallescens* var. *reptile* が豊富である。

c. **カール底**．濃ケ池カール及び千畳敷カール（約 2,600m）底部ではハイマツは大形となり樹高 2〜2.5m を示す。タカネナナカマド，*Vaccinium* sp. が多く見られる。地上蘚苔類では *Dicranum majus* が優占するが，地衣類は殆ど認められない。着生蘚苔類の種数は最も多く，基部に *Ptilidium californicum* が優占し，*Dicranum fuscesens*, *Hypnum plicatulum*, *Lesquereuxia robusta* も多い。匍匐幹上には *Ptilidium carifornicum* が優占し，*Dicranum fuscescens* も多い。斜上幹上には *Ulota crispula* 他 2 種が認められる。

2.　立山　a. **斜面**．一の越附近及び浄土山の斜面（約 2.800m）のハイマツ樹高は 25〜40cm，地上蘚苔類群落の優占種は *Dicranum fuscescens* で *Pleurozium schreberi* がこれに次ぐ。地衣類群落は貧弱である。着生蘚苔類は基部で *Ptilidium pulcherrimum* が優占し，*Dicranum fuscescens*, *Pt. carifornicum* 及び *Hypnum plicatulum* も著しい。匍匐幹上には *Hypnum plicatulum* が最も多く，*Pt. pulcherrimum*, *Habrodon piliferus* も多い。斜上幹には *Ulota crispula* 他 2 種が少量着生する。

b. **五色ケ原**（約 2,600m）．ハイマツは大形で樹高 2〜2.5m，タカネナナカマド，*Vaccinium* sp. その他の灌木が随伴する。地上蘚苔類の量は少いが *Dicranum majus* が優占する。着生蘚苔類の種数は最も多く，基部では *Dicranum fuscescens* が優占し，*Pt. californicum* がこれに次ぐ。匍匐幹上には *Ptilidium californicum* が優占し，*D. fuscescens*, *Hypnum pallescens* var. *reptile* がこれに次ぐ。斜上幹の優占種は *H. pallescens* var. *reptile* で尚数種が認められる。

高山帯に於ける気象条件，特に冬期の積雪の状態はハイマツに著しい影響を及ぼし，ハイマツの樹高の差はその環境を示して居ると考えられる。地上の地衣・蘚苔類群落はハイマツの大きさ，密度に依つて異なる。即ち光，湿度及び温度条件，特に積雪状態の差異に基く。

地上の蘚苔類の被度は尾根に多く，斜面で最大となり，大形ハイマツ群落内で再び減少する。地上の地衣類は尾根附近にのみ豊富に生育する。着生蘚苔類群落も上記の環境に応じて優占種及び種の組合せが変化する。特に五色原では亜高山帯の針葉樹上に数種の蘚苔類の豊富な群落を見出した。蘚苔類の着生部位も尾根では殆ど基部のみに限られ，大形ハイマツ群落では時には枝上にまで達する等のちがいが観察された。

Summary: In the summer of 1955 we examined the epiphytic bryophytes on *Pinus pumila*, a shrubby pine occupying the alpine area of Japan. The investigations were carried out on the summit of Mts. Kisokama and Tateyama, ca. 2800 m in altitude. The dominant bryophytes are *Dicranum fuscescens* (usually at the base of tree), *Hypnum plicatulum*, *Pitilidium californicum* and *Pt, pulcherrimum*, *Hypnum pallescens* var. *reptile*, *Habrodon piliferus* and *Ulota crispula* (the latter two occurred in the higher portion of trunk than the others).

〇数種の花色異品 （池上義信） Yoshinobu IKEGAMI: Some new forms of the flowering plants

花色の異品若干を報告する。標本はすべて国立科学博物館におさめてある。

(1) **アカバナヒキオコシ**（新称） クロバナヒキオコシの花は通常黒紫色であるが，腊葉では時に赤く変色する。ここにあげるものは生時少しも紫色を帯びない明るい赤花のもので，越後南魚沼郡土樽村の蓬峠の産。

(2) **シロバナユキツバキ**（新称） 故中井猛之進博士が越後へユキツバキの調査に来られた折，津川町きりん山温泉松仙閣主人西脇総太郎氏の案内で白花品の十数株群生している所を御覧になられ，雑誌“温泉：19巻10号（昭和26年)” に「白花のユキツバキ，稀品なり」と写真を掲載されたが，中井博士も西脇氏もすでに故人となり，命名もそのままになつてしまつたので，筆者は当時同行した一人としてここにこれをとりあげることにした。因に白花品は佐渡その他にも知られている。

(3) **シロバナオニアザミ**（新称） 越後中頸城郡の妙高山で同，刈羽郡勝山小学校の広川豊栄氏がオニアザミの白花品を採集したが，当時標本を筆者から中井博士にお渡ししたままになつているので今ここに紹介する。なお羽前長井の標本が結城嘉美氏によりその後国立博物館の第17回腊葉展に出品されている。

(4) **シロバナカガノアザミ**（新称） カガノアザミは裏日本を京都から山形にかけて分布するが，その白花品を記録する。山形県西田川郡温海岳のもの。

(5) **シロバナサドブシ**（新称） サドブシの白花品で佐渡相川町戸地の産。なお他のトリカブトにもあるように，白花でもかすかに紫を帯びるような個体も多い。

(6) **シロバナエチゴトラノオ**（新称） エチゴトラノオは越後岩船郡瀬波のもので記載